朝日新聞
2012年（平成24年）
1月1日
日曜日
元日

その笑顔 誰かの力に

被災地を中心に東京や各地から

この作品は、「メリー・プロジェクト」の一環として、朝日新聞に向けてデザインされた。東日本大震災の被災地を中心に、東京をはじめ、各地の人たちの笑顔をハートに詰め込んだ。「つらい出来事があっても乗り越えて、みんなが笑顔に。そんな願いを込めました」

「幸せ」を思い浮かべて

「メリー・プロジェクト」に取り組む 水谷孝次さん

あなたにとって、幸せ、楽しいことって何ですか――。

こう尋ねながら笑顔を写真に収め、傘やポスターにあしらう。「メリー・プロジェクト」と題したこんな取り組みを始めたのは、1999年にさかのぼる。

「メリー」は、英語で「楽しい」「陽気な」を意味する言葉。これまでに世界26の国と地域で3万人以上を撮影し、大地震があった中国・四川や、大津波に見舞われたインドネシア・スマトラ島にも足を運んだ。神戸で撮った500人近い笑顔は、復興支援に感謝するメッセージとして発信された。

昨年は、東日本大震災後の被災地に入った。

初めて訪れたのは、4月下旬の福島県いわき市。持参した笑顔の傘を広げると、避難所の人たちの顔が和らいだ。

家が流され、肩を落としていたお年寄りの夫婦は、こんな言葉をくれた。「震災以来、初めて笑ったよ」

名古屋生まれ。陽気だった父は戦争で出征中に片耳の聴力を失い、復員して闇を背負った。「戦争が悪い」「社会が悪い」。そう考えた少年時代。いつしか「大人になったら世の中を良くする仕事をしたい」と思うようになった。

地元の大学を卒業し、デザイナーを目指して東京へ。勤務したデザイン事務所で、ごみ箱に捨てられた先輩たちの作品を持ち帰り、ひそかに勉強した。仕事が終わると、夜学のデザイン学校に通って基礎を学んだ。

寝る間も惜しんで働き、企業のポスター制作で数々の賞を受賞した。億単位の仕事も多く舞い込んだ。

しかし、そんな中でむなしさも募っていったという。スターさえ登場させればいいという依頼。仕事を抱えすぎて、作品の質が落ちていくのが自分でもわかった。そして、疲れ切った暮らし。

仕事をいったん清算し、自分を見つめ直した。「子どものころの夢を思い出そう。人を幸せにする仕事をしよう」。その思いは、「メリー・プロジェクト」で少しずつ形を結んでいった。

昨年9月には、震災の「3・11」と同時多発テロの「9・11」をつなぐイベントをニューヨークで開いた。子どもたちの笑顔の傘が、タイムズスクエアで一斉に開いた。

震災、テロ、紛争……。各地で悲劇が後を絶たない。

だからこそ、笑顔。誰かの生きる力、争いを止める力になれるかもしれない、と思う。

これからも、いろんな笑顔で傘の花を咲かせるつもりだ。「幸せいっぱいの地球になるように。僕はデザインで力を尽くしたい」

（黒川和久）

万博・五輪舞台に

みずたに・こうじ　アートディレクター。60歳。1983年、港区に水谷事務所を設立。企業のポスターを数多く手がけ、96年にはワルシャワ国際ポスタービエンナーレで金賞を受賞した。2005年の愛知万博では、「メリー・プロジェクト」の活動として世界各地の笑顔を大画面で紹介。08年の北京五輪の開会式では、世界の子どもたちの笑顔をあしらった傘が一斉に開いた。